View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Wakayama University Academic Repository

平成 30 年度　実践的地域共育推進事業概要活動報告書
実践研究課題：新学習指導要領に対応した「高齢者」授業の創造
－衣食住生活の内容と関連づけて－

智辯学園和歌山中学校　　西岡　真弓
和歌山大学教育学部（被服学）　今村　律子
（住居学）　村田　順子
（家庭科教育）　山本　奈美

１．はじめに

中学校では本年度から新学習指導要領への移行期間が始まっている。「高齢者」の内容についてこれまでは、教科書の中で地域や住生活の一部に記載があるだけで学習指導要領には掲載されていなかった。しかし、今回の改訂では、少子高齢社会への対応をめざし、高齢者との関わり方に関する内容が新設されている。これまで中学校では実践されることが少なかった高齢者授業であるが、今回の改訂をうけ、授業づくりを進めていくことが急務である。

2016 年度から中学校家庭科の高齢者授業というテーマで取り組んできた本研究も今年度で 3 年目の報告になる。一昨年度と昨年度は「衣生活」と「高齢者」の学習を融合した「高齢者にとってふさわしい衣服」について考えさせる授業を計画・実践し報告した。今年度は、高齢期の生活を様々な側面から見つめることで、身体的特徴だけではなく高齢者の心理面や生き方についても理解させることをねらいとして、「高齢者の衣生活」の授業改善と、「高齢者の生き方理解」、「高齢者の住生活」の授業追加を行い、中学校および高等学校で実践してきた内容について報告する。

２．活動の概要

勤務校である智辯学園和歌山中学校（3 年生）と開智高等学校（1 年生）の 2 校で実践した。

また、学部授業「中等家庭科教育法Ｂ」の中で教材開発研究の内容として講義をしたり、実際の授業を学生に見せたりすることで、研究の成果を学生に還元した。

表 1　2018 年 1 月～2019 年 2 月の活動

年月	内容	備考
2018 年 1 月～2 月	智辯学園和歌山中学校での実践（実践Ａ）	
2018 年 1 月～2 月	開智高等学校での実践（実践Ｂ）	2/21　今村 授業参観・協議
2018 年 10 月～11 月	開智高等学校での実践（実践Ｃ）	10/22　今村 授業参観・協議 11/19　村田, 学生 2 名授業参観・協議
2018 年 10 月	中等家庭科教育法Ｂ　実地指導講師	10/17 10/31 学生 6 名受講
2019 年 1 月～2 月	智辯学園和歌山中学校での実践（実施中）	

３．授業実践
（１）指導計画

2018 年 1 月～11 月に各校で実践した指導計画は表 2 の通りである。昨年度は表 2 の小題材 1～4（4 時間）の計画で実践した内容について報告した。今年度は、衣生活授業を改善した 1 時間（小題材 4 ※1）と追加した 3 時間（小題材 5～7）の実践について報告する（表中の網掛け部分）。

表 2　指導計画（Ａ, Ｂ, Ｃは表 1 の実践Ａ, 実践Ｂ, 実践Ｃをさす）

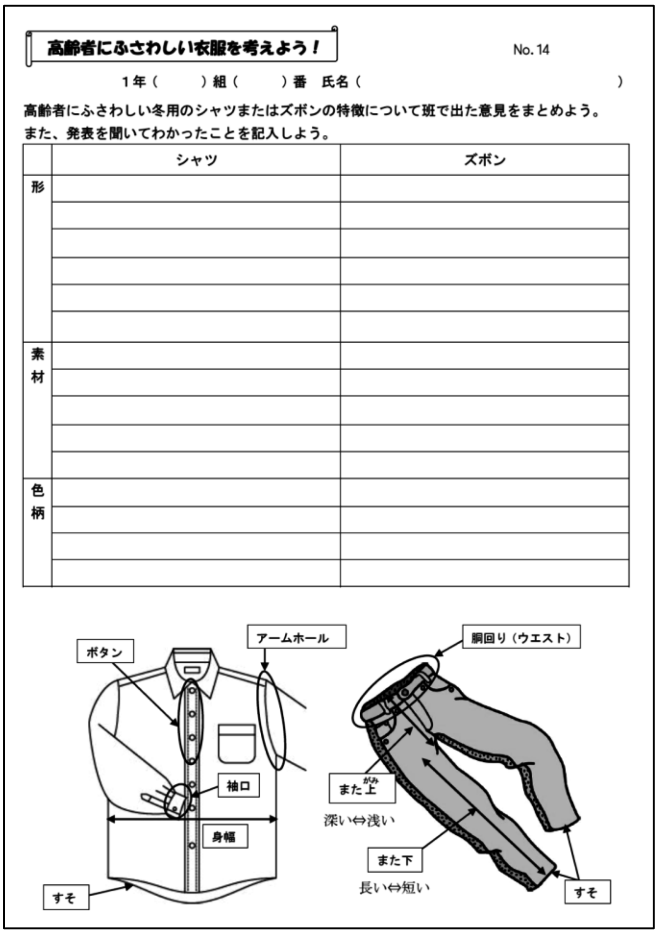
小題材名	学習内容	A	B	C
1．高齢者を理解しよう①	高齢者へのイメージを考える。 高齢者の体と心の特徴を知る。	1 h	1 h	1 h
2．高齢者を理解しよう②	高齢者体験をする。	1 h		
3．高齢者の衣生活を知ろう	高齢者の衣生活問題の原因を考える。	1 h	1 h	1 h
4．高齢者にふさわしい衣服を考えよう	高齢者の快適･安全な衣服を考える 衣服の心理に及ぼす影響を知る。	1 h	1 h ※1	1 h ※1
5. 高齢者が生き生きと自立するために	社会で活躍する高齢者を知る。 高齢者と共に生きる社会を考える。	1 h	1 h ※2	1 h ※2
6．磯野家をリフォームしよう①	高齢者の住生活の不自由さや家庭内事故につながる問題点を知る。	1 h	―	1 h
7．磯野家をリフォームしよう②	高齢者が快適・安全に生活できる住まいを考える。	1 h	―	1 h

※1　「高齢者にふさわしい衣服」の授業内容を一部改善して行った。
※2　介護保険制度など福祉の内容を加えて行った。

（２）「高齢者にふさわしい衣服を考えよう」の授業改善

小題材３「高齢者の衣生活を知ろう」の授業は、グループで考えた衣生活での問題点を改善し、高齢者にとって快適・安全な衣服を考える授業である。昨年度は、高齢者にふさわしい冬用のシャツを題材として取り上げ、全グループにそのシャツについて考えさせるものであった。今年度は、上衣だけではなく、学級のグループのうち半数は下衣について、高齢者にどのような「形・素材・色柄」のズボンがふさわしいかを考えさせる内容に改善した。そのようにすることで、シャツだけの場合には、腕や指先の動きなど上半身の身体的特徴を考えることが中心になってしまったが、ズボンを加えることで下肢の運動機能や平衡性についても具体性を持って理解を深めさせることができた。さらにここで理解した下肢の運動機能や平衡性の低下は、後で学習させる住生活での不自由さや家庭内事故とも大きく関わることであり、衣と住の両分野を関連させて高齢者の生活を学ばせることにつながった。

図１　サンプルを見ながら話し合う様子



高齢者にふさわしい衣服を考えよう！　No. 14

1年（　　）組（　　）番　氏名（　　　　　　　　　）

高齢者にふさわしい冬用のシャツまたはズボンの特徴について班で出た意見をまとめよう。
また、発表を聞いてわかったことを記入しよう。

	シャツ	ズボン
形		
素材		
色柄		

図２　改善したワークシート

（３）「高齢者が生き生きと自立するために」の授業

この授業を加えた理由は、昨年度に行った授業では高齢者の生活における不自由さを理解させることが中心となり、生徒に高齢者の負のイメージだけを植え付けてしまったのではないかという反省からである。高齢者の持つ特徴を正負両面から理解させたいと考えた。

導入では、新聞記事「アプリおばあちゃん＠国連」（図３）と投稿記事「ドアばあちゃん」により、２人の高齢者を紹介した。２つの記事には、「他人の役に立ちたい」という願いを持ち、それを行動に移して生き生きと生活している高齢者の様子が書かれている。

展開１は教科書の図で、高齢者のグループ活動の状況とそれが持つ意味を理解させ、自分の身近にいる高齢者の活動を思い出させた。生徒のワークシートには、自分の祖父母が地域のために活動していることや、交通見守りをしてくれている地域のお年寄りを思い出した記述があり、いずれも高齢者に対する「感謝」や「尊敬」の念が書かれていた。展開２では、高齢者の自立のために地域で行われている３つの取り組み事例、「各地域に設置されているシルバー人材センター」、「泉北ニュータウンの IoT を活用した高齢者の運動促進事業」、「葉っぱビジネス」を紹介した。

最後に、授業の感想と「高齢者の自立を支援するために、これからどんな社会をつくり、どう関わればよいと思うか」を書かせてまとめとした。

アプリおばあちゃん@国連

82歳・若宮さん 基調講演

【ニューヨーク＝共同】高齢になってからスマートフォン向けのゲームアプリを開発したことで知られる若宮正子さん（82）＝神奈川県藤沢市＝が２日、高齢者とデジタル技術をテーマにした国連での会議で基調講演した。若宮さんは自分の経験を交え、デジタル技術を活用すれば高齢者もやりたいことができると思えるようになると訴えた。

ニューヨークの国連本部で開かれた会議で基調講演した若宮正子さん（共同）

「高齢者が元気な社会づくり 考えて」

若宮さんは英語で講演。物忘れをしがちな高齢者にカレンダーのアプリが便利であることや、離れて暮らす家族や友達とのやりとりにビデオ通話が役立つことなど、高齢者から見たデジタル技術の利点を列挙。さらに、表計算ソフトを使って高齢者にも親しみやすい幾何学模様のデザインを考えたり、高齢者向けのアプリを開発したりしたことなど自分の活動を紹介した。「どうすれば高齢者が元気で、大切な役割を担い続ける社会をつくれるか、国連も考えてほしい」と話した。

若宮さんは80歳を過ぎてからアプリを開発。安倍晋三首相は１月の施政方針演説で、若宮さんの「人生100年時代、学齢期の教育だけでは不十分です」との発言を紹介した。講演終了後、若宮さんは「多少緊張したが、言いたかったことはある程度通じたのでは。今後はデジタル技術になじめない人をサポートする活動がしたい」と話した。

会議は国連の経済社会局と日本の国連代表部などが共催した。

図３　紹介した新聞記事(2018.2.4 産経新聞)

表３　「高齢者が生き生きと自立するために」の指導の流れ

段階（時間）	学習活動	指導上の留意点
導入（10分）	新聞記事から生き生きと活躍する高齢者の「人の役に立ちたい」という気持ちに気づく。 本時の目標を知る。	記事の高齢者が生き生きとしている秘訣は何だと思うかを考えさせる。
展開①（10分）	教科書の図から身近な高齢者のグループ活動の状況を理解する。	生徒に身近な例を挙げて説明する。
展開②（30分）	高齢者の自立のために地域で行われている３つの取り組み事例、「各地域に設置されているシルバー人材センター」、「泉北ニュータウンの IoT を活用した高齢者の運動促進事業」、「葉っぱビジネス」を知る。	生きがいをもつことが高齢者の心身にどのように影響を及ぼすかについても触れる。
まとめ（10分）	高齢者の自立を支援するために、どんな社会を作り、どう関わればよいかを考える。	高齢者とともによりよく生きる社会についても考えさせる。

（４）「磯野家をリフォームしよう」の授業

この授業は２時間の計画で行った。１時間目は 20 年後の磯野家では高齢になった波平さん・舟さんにとって住まいにどんな問題点があるかを考えさせた。指導にあたっては、高齢者の身体的特徴と住まいとの関係を理解させるために手立てを２つ行った。１つ目は、年齢を重ねると下肢を上げにくくなることと、平衡性が低くなることをグラフから読み取り、住まいでどんな困難が起こるかを考えさせた。また、それが家庭内事故にもつながることをおさえた。２つ目は、より生活の場面がイメージしやすいように、20 年後の磯野家の会話をロールプレイングにし、セリフの中に「最近立ちあがるのに時間がかかる」、「立ち上がる時にヒザが痛い」、「敷居でつまずかないように」など二人の身体状況がわかる言葉をちりばめた。単に「高齢者」ではなく、生徒になじみのあるアニメの登場人物を活用したことで、実感を伴った学習につなげることができたのではないかと思う。

図４　ロールプレイングに用いたフェイスボード

また、住まいの問題点を考えさせる際の資料には、間取り図だけではなく、立体的に把握しやすいイラストや生活の様子が想像できる説明書きを添えた（図５）。生活の様子の１つに、波平さんは庭で趣味の盆栽を育てていることを入れ、高齢者にとって生きがいにもなる生活行為を、身体が衰えても住まいの中で継続できることの意義も理解させたいと考えた。

２時間目は１時間目に考えた磯野家の問題点を改善する授業であるが、改善方法には、リフォームだけではなく、家具の変更や追加をするなど住まい方を工夫する方法もあることを説明し、床座と椅子座の特徴を理解させた。その後、グループで話し合った内容を前に掲示して発表させた。

住まいの改善方法として手すりをつけたり段差をスロープにすると考えたグループが圧倒的に多かったが、中には動作がしやすいように生活様式を椅子座にすることや、靴をはいたり着替えをする際に転倒を防止するための椅子を配置することに気づけたグループもあった。また、学習済みのヒートショックや着衣着火などの知識を生かして、脱衣室に暖房をつける、台所を IH コンロにするなどの改善点を提案したグループもあった。生徒の感想の中には、「様々なアイデアを出すことができても現実にはお金がかかって実現できない場合もあ

る。」というものがあった。高等学校での授業では、介護保険制度について学習済みであったので、介護保険サービスの住宅改修についても触れ、住まいの改善に経済的支援が得られる場合もあることも理解させた（表4）。

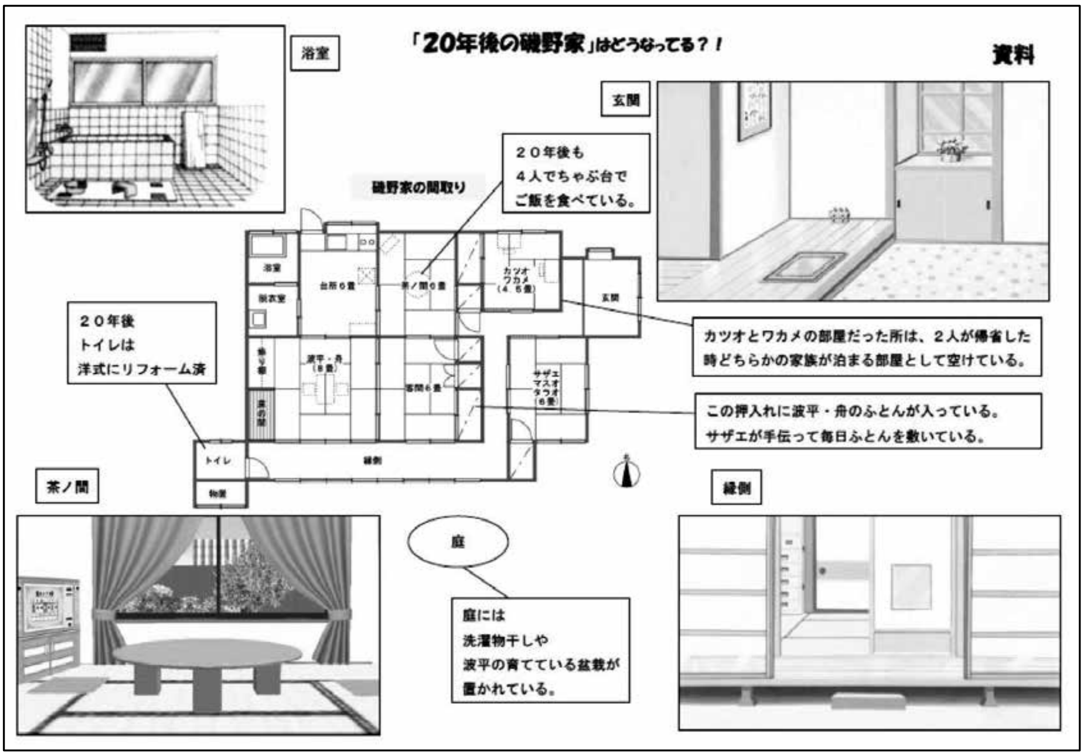


図5　資料「磯野家の間取り図」

表4　「磯野家をリフォームしよう」（2／2時間）　2018年11月開智高校にて実施

	学習活動	指導上の留意点	評価等
導入（5分）	本時の目標を知る。	・前時の学習をふりかえらせ、本時は、前時各自が考えた磯野家の問題点を改善する方法をグループで考えることを伝える。	
展開①（10分）	床座と椅子座の特徴を理解する。	・床座・椅子座のそれぞれの長所と短所を理解させ、高齢者の場合どちらの生活様式が生活しやすいかを考えさせる。	椅子座と床座の特徴がわかる。【知識・理解】
展開②（35分）	20年後の磯野家で、波平・舟が生活しやすくするための方法（住まいのリフォーム、生活様式の改善）についてグループで考え、発表する。	・高齢者は住まいで過ごす時間が増えるため、安全・快適であることに加えて、生活を楽しむためにどんな工夫があるとよいかについても考えるようにさせる。 ・話し合いがスムーズにすすめられていないグループには助言をする。 ◎予想される意見 ・手すりやスロープをつける　・居室にベッドを置く ・玄関・洗面所などに椅子を置く　・脱衣室にエアコン ・茶の間をテーブルと椅子に　・コンロをＩＨに ・風呂の床を滑らず温かく ・手すりの形状と衣服の形によっては、事故につながる場合があることに触れる。 ・要支援または要介護の認定を受けている場合、介護保険サービスでリフォーム費用の一部を給付してもらえることに触れる。	高齢者が生活しやすい住まいについて積極的に考えている。【関心・意欲・態度】 高齢者が生活しやすい住まいにするための方法を工夫している。【思考・判断・表現】
まとめ（10分）	本時の学習をふりかえり、自分の考えをまとめる。	・高齢者にとって快適・安全な住まいとはどんな意味をもつのかを考えさせる。 ◎手すりのないところではどう補助をすればよいだろうか？	

４．まとめ

2016 年度の高齢者の身体的特徴の理解と衣生活の授業に、2017 年度、2018 年度は高齢者の生き方理解と住生活の授業を加えて計画・実践した。また、衣生活の授業については、上衣のみ考えさせる授業から上衣・下衣両方について考えさせる授業へと改善した。その結果、グループ学習の発表や感想文の内容から、次の２つの成果が得られたと考える。

１．「高齢者体験」、「実際の高齢者の生き方を知る学習」、「高齢者の衣服や住まいを通して理解する学習」などの活動により、高齢者の身体的な不自由さだけではなく前向きさやプラス面についても、実感を伴って理解することができた。

２．「高齢者理解」、「高齢者の衣生活」、「高齢者の住生活」という一連の学習によって、高齢者の生活をトータルに理解することができた。特に、「住生活」の授業を最後に設定することで、それまで学習してきたヒートショックや転倒、着衣着火などの事故を回避する方法を、「生活」の中の具体的なこととして実感しながら学ぶことができた。

以上のような成果を得ることができたのは、この連携事業に参加させていただき、高齢者授業について大学教授の専門的知識や指導に関するご助言をいただけたことが大きいと実感している。しかし、他の中学校、高等学校との連携については、教育現場での多忙さもあり、なかなか実現しづらい状況にある。この連携事業で検討を重ねある程度の成果が得られている高齢者授業を、他の学校でも実践していただきご意見を頂戴し、さらに改善していくことが今後の課題である。

なお、本実践内容の一部を日本家庭科教育学会第 49 回近畿地区大会（8 月 18 日、於：大阪教育大学天王寺キャンパス）において発表した。

<u>「高齢者が生き生きと自立するために」授業後の感想（2017 年度　智辯中）</u>

・バス待ちの時に夫婦で楽しそうに散歩しているおじいちゃんとおばあちゃんがいます。私にいつも勉強について話をしてくれます。元教師だそうです。教師として生徒に何かを伝えたいのだと思います。高齢者と明るく関わっていく社会が作れたら素敵だなと思いました。

・若者だけでなく高齢者も活躍できるようなアクティブな社会を作っていけば明るい生活が増えると思いました。また、高齢者と若者でお互いに不足した部分を色々な仕事で補っていくような生活ができるといいなと思いました。

・少子高齢化社会という暗い雰囲気のことばをよく聞きますが、生き生きと生活を楽しむ高齢者の行動を聞いて、明るい気持ちになりました。また、地域のためにしてくれている活動に感謝しようと思いました。これから増えていく高齢者が楽しく暮らせるようにすれば明るい社会になると思います。

・高齢者と言っても、すべての人が動けなくなっているわけではなく、元気に生活している人がいるので、横石さんが言ったように出番を私たち若者が作り、協力して社会をつくりあげていくことが大切だと思いました。

<u>「磯野家をリフォームしよう」授業後の感想（2017 年度　智辯中）</u>

・高齢者がすごしやすくなるための工夫はたくさんあることがわかったので、祖父母の家にも何か工夫できることはないか考えてみようと思う。

・リフォームで快適な生活はできるようになるけれど、和の文化がなくなってしまうのはさみしいと思った。

・私たちは生活しにくいと感じることが少ないので、案を出すのは難しかった。

・若いころに家を建てる場合には高齢者になったときのことも考えて設計する必要があると思った。

・健康で長生きするために家のリフォームも大切だなと感じました。祖父母の家にも変えなければならないところがたくさんあると思うので、それも提案してみたいです。

・いろいろな意見が出たが、全てやるのは難しいし、高齢者が面倒くさいと感じるのではないかと思った。より快適に暮らしてもらえるように、自分たち（孫や子ども）から働きかける必要があると感じた。

・昔の生活から今の生活に変化しているところに波平や舟がついていけるようにフォローするのも大事だと思った。

・リフォームしなくてもグッズやちょっとした工夫でもバリアフリーにつながると思いました。